

## 入選

テーマ：未来のための今を生きる  
「言語を超えた思いやり」

和歌山県・智辯学園和歌山高等学校1年 中尾航

「和歌山というところを思い浮かべますか」。そんな質問を投げかけた時、返ってくる答えは「梅」「みかん」……だろうか。そこに「インターナショナル」という言葉は出てこないだろうと思う。だが、この小さな町にも国際化の波が来ていることを僕は感じている。通学で駅を使うと、日本語ではない言葉が耳に入ってくるのだ。日本の介護を勉強している留学生もいる。そして、そこに新しい「共に生きる社会」も始まっているように思える。

和歌山の介護施設で働いているインドネシア人のアプデイさんが、一緒に食事をしている時、こんな話をしてくれた。アプデイさんがオムツを交換しようとする時、恥ずかしくて「嫌だ、嫌だ」と拒否したおばあさんがいたそうです。そのおばあさんにアプデイさんは「私にも国にお母さんがいます。大丈夫です。田中さんは、私の日本のお母さんだと思っていますから。大丈夫です」と話し、それを聞いたおばあさんは涙を流していたそうです。

僕はガツンと衝撃を受けた。自分はとっさにそう言えるだろうか……。日本人、外国人、日本語が流暢（りゅうちょう）に話せる、話せないではなく、人間性の問題だと思った。相手の気持ちにいかにか寄り添えるかだと思う。日本人であっても、日本語を上手に操ることができたとしても、心がなければ、その言葉は出てこない。アプデイさんの口から発せられた言葉は、アプデイさんの優しさそのものなのだろうと思う。排せつ介助という特別な言葉があるぐらいセンシティブな部分を他人に任せなければならないのはつらい。そのつらさをそっくり包みこむような優しさが、恥ずかしさやつらさを破るのではないかと思う。アプデイさんの言葉が持つ優しい破壊力、言葉にのせる

相手への思いやり……。僕は話を聞きながら、考え込んでしまった。

そして、アプデイさんが何の躊躇（ちゅうちよ）もなくオムツ交換の話をしてくれたことにも驚いた。僕の中では、見てはいけないもの、触れてはいけないことと思いついてきたからだ。入院中、オムツ交換が必要だった祖母は実の娘である母にもいつも「ごめんね」と言っていたという。祖父のオムツも近所で買うのではなく、少し遠い店で買っている。ご近所には知られたくないという祖父のプライドだ。それが分かるから、祖父が失敗しても、僕は気づいていないふりをする。内緒で母に伝え、なんとかするのは母。それが思いやりだと思っていた。だが、それは単に都合のいい思いやりで逃げなのではなかったかと急に思えてきた。大切なのは、目の前の相手にどう伝えるかではないかと気づかせてくれた。

アプデイさんは、「そのおばあさん、私に『ホ（きへん）』や『シ（さ）んずいへん』の漢字をたくさん教えてくれます」とも話してくれた。オムツ交換で涙を流したのも現実。漢字を覚えてくれるのも現実。助けられ、助けて、立場が変わる。

少子化、超高齢化、待ったなし。僕たちの未来を表す言葉は必ずしも輝きを放つものばかりではない。しかし、そもそも現実はどこからか一方ではなく、喜び悲しみ、つらさ楽しさ、その瞬間、瞬間のいろいろな要素がらせんのようにつながっているものだと思う。そして、人は一人では生きていけない。常に人とかわり合い、助け助けられて生きている。傍観者ではなく、僕もその中にいるのだ。ならば、僕も目の前の相手の悲しみが軽減できるよう努力していきたい。アプデイさんのように相手を思いやる自分の言葉を持ちたい。少子化、超高齢社会、国際化、AI、大きな流れを意識しながら、今、僕がやるべきこと、頑張らなければならないことを一つ一つ地に足を着けて頑張っていきたい。

「台風、大丈夫でしたか」。先日、僕の家にもホームステイをしていた李君からラインが届いた。誰かを思いやる気持ちは、言葉の壁をも凌駕（りょうが）（りょうが）する。アプデイさん、李君、僕はいろいろな人と共に努力をしたい。